

受け入れた学童疎開のあらまし

父母や兄弟と別れた集団生活。何もかも今までの環境と異なつた学童疎開の生活：

●学童疎開の受入れ

時の流れは早いもので、学童集団疎開は半世紀以上も前の出来事となつた。

太平洋戦争の敗色濃くなつた昭和18年、政府は閣議で「都市疎開実施要綱」を発表。

その後、昭和19年6月30日には、都会で学ぶ児童の安全を考え「学童疎開促進要綱」を決定し、強力に促進することとした。

その内容は、

縁故疎開を原則とする。

縁故疎開により難い帝都学童につい

ては、帝都学童集団疎開実施要領により勧奨による集団疎開を実施する。

実施に当り疎開受入れ両者間は、有機

一的な協力を行うものとする。

地方庁は、疎開者数と疎開先を農商省に通知する。

の4項目であつた。

それを受けて神奈川県は「学童疎開促進要綱」を定め、縁故疎開を原則にしつともそれが困難な横浜・川崎・横須賀の3市については縁故疎開のほか、学校ごとにまと

まて行く集団疎開を実施することとした。

疎開の対象となつたのは、それら3市の国民学校の3年生以上6年生までの約10万人で、県内疎開を原則とした。

そうした中で、学童疎開の実施決定から僅か1カ月の間に3市では班別編成や疎開地の実施踏査、荷物の運搬などの集団疎開準備が進められた。

(表1)

昭和十九年八月 綾瀬村学童疎開児童宿舍別配置表

集団疎開児童人員配当表

諏訪国民学校

部 落	早	川	吉	岡	土	合 計		三 年 計	四 年 計
						合 計	合 計		
宿 舎	長 泉 寺	龍 洞 院	青 蓮 寺	正 福 寺	蓮 光 寺	合 計	合 計		
六 男	一〇	六	二	四	七	二五	二五		
六 女	八	三	一	四	六	二二	二二		
五 男	四	二	三	三	三	一五	一五		
五 女	四	二	三	三	三	一五	一五		
四 男	六	三	四	二	五	二〇	二〇		
四 女	四	四	一	三	四	一六	一六		
三 男	三	四	三	一	五	一六	一六		
三 女	四	三	二	一	四	一四	一四		
合 計	四三	二二	一三	一六	二七	一二一	一二一		
		一七		一四	七				
		二五		三	一〇				

綾瀬は横須賀市の諏訪国民学校の学童疎開児童を8月13日に受入れた。

その受入れ地域は、早川、吉岡、上土棚で、5寺院（長泉寺、龍洞院、済運寺、正福寺、蓮光寺）と2青年倶楽部（早川、吉岡）の7カ所を寄宿先とし、総人数217名(表1)で疎開生活がスタートした。その寄宿先では、何より便所の用意が大変で、地元の有志が樽や甕(かめ)を寄付、それをムシロで囲うなどして便所を作つたという物資不足での苦労があつた。また、寄宿舎の整備には、地域の方が井戸掘りや風呂場、食堂造りなどにも力を注いだ。

そこで児童達は寄宿生活をしながら地元の国民学校に通つたり、その寄宿先を教室にして勉強や農作業に取り組んだのである。

●疎開生活

そうした学童疎開児童の生活状況は、学童疎開が物資不足、食糧難の中で行われたことと併せ、準備も十分でなく進められたため、苦しく、つらい体験であつた。



綾瀬国民学校の体錬会(運動会)

疎開という集団生活に入っただ子ども達は
 急激に環境も変わり、寂しさや望郷の念か
 ら涙を流す子どもも少なくなかった。だが、
 それも時間とともに解消し、野原や森、川
 などで活発に動き回ったり、村の大人や子
 ども達と祭礼や秋の体錬会(現在の運動会)
 などを通して一緒に楽しく過ごすようにな
 った。

当時の服装としては、綾瀬はみな着物姿
 であつたのに比べ、横須賀の子どもは洋服

で、そこに都会の子という印象を与えた。

当時の疎開児童の生活状況の一端をうかがうと、まず日課としては、朝5時に起床し、班別に健康調査等を行ったのち、午前6時に洗面、清掃、食事準備、水汲み、体操、朝食と続き、7時以降は食器洗い、整理整頓。9時から正午までを作業または勉強、運動となっており、この時間帯で畑作り、工作、自習、蠅取競走、行軍、洗濯、お話会、通信、自由遊び、水泳が行われている。

さらに午後は、正午から昼食の後、食器洗い。午後1時から2時までが休憩。2時



米俵を牛車で運ぶ学童

からは作業又は勉強、運動。4時には交互に入浴と運動。5時から夕食、入浴、食器洗い。6時から7時までが自由時間で、自習、通信、お話会、治療等が行われ、7時から点呼、健康調査。8時に消灯・就寝で一日の生活を終えている。

また、衛生面では、頭痛や腹痛、歯痛、扁桃炎による発熱、結膜炎、切り傷などが発生。そのほか医療設備の一層の充実として、薬品の数と量、注射器の用意を望んでいたと同時に、他に油と乾小魚(ダシ粉)、病人用白米の特配などの希望も出されていて、戦時下の物資不足に苦労していた様子が如実に示されている。

● 疎開時の授業等

学校の授業は、疎開児童を受け入れるだけの教室はなく、午前と午後に分けた二部授業を実施し、週2〜3回は綾瀬村国民学校に登校した。しかし宿舎から学校までの道は遠く、雨具も配給品であつたので雨の日には子どもは登校しなかったりした。

その後、次第に授業時間や勉強内容も少なくなっていく、空襲が激しくなると登校も中止されていくが、学習は宿舍内等で休みなく続けられた。



庭先にムシロを敷いて食事

疎開校の先生も又、授業は勿論のこと、食事、清掃、洗濯、勤労作業など多くの仕事に携わらざるをえなかったが、中でも食事は育ち盛りの子ども達だけに毎日が大変な苦勞で、中には農家を回って小麦などを分けて頂くような先生もいたようであった。そんな中で行われていた実習には、高等科の生徒による航空隊の中の水田耕作があり、稲刈りや掛け干し作業まで経て収穫

し食糧難の時代に貢献した。また、繊維不足を補うため農家で育てたラミーの刈り取りをしたり、桑の皮を剥いで繊維を取って納めたりした。さらに食糧難に僅かでも役立てようと蒔いた蕎麦は校庭に見事な花を咲かせ、初めて見る子ども達に喜びをもたらした。綾瀬小前の実習地では疎開学童も加わって栽培した豆の取り入れも行われている。そのほか、秋の農繁期には疎開学童

(表2)

昭和十九年十一月 綾瀬村疎開学童の秋季農繁期勤勞動員状況

疎開学童分(諏訪校)

月日	曜	天候	早川	分	吉岡	分	上	土	分	分
十一月	水	晴	初三・四	人員	初五・六	人員	初三・四	人員	初五・六	人員
二	木	曇	【疎開】 【茶葉拾と】	疎採集、団葉拾	茶葉集、宿舎清掃					
三	金	大雨	【疎開】 【明治節】(拝賀式)							
四	土	晴	【疎開】 【蟬採】	蟬採集						
五	日	曇	【疎開】 【蟬採】	蟬採集						
六	月	曇	団葉拾	稲刈、落花生モ、芋掘	【茶葉】 【甘藷採】 (一戸三人乃至四人位配当)					
七	火	曇	同							
八	水	曇	軽ミ採	同						
九	木	快晴	茶葉拾	同						
十	金	快晴	茶葉拾	同						
十一	土	快晴	茶葉拾	同						
十二	日	快晴	茶葉拾	同						
十三	月	快晴	茶葉拾	同						
十四	火	快晴	茶葉拾	同						
十五	水	快晴	茶葉拾	同						
十六	木	快晴	茶葉拾	同						
十七	金	快晴	茶葉拾	同						
十八	土	快晴	茶葉拾	同						
十九	日	快晴	茶葉拾	同						
二十	月	快晴	茶葉拾	同						
二十一	火	快晴	茶葉拾	同						
二十二	水	快晴	茶葉拾	同						
二十三	木	快晴	茶葉拾	同						
二十四	金	快晴	茶葉拾	同						
二十五	土	快晴	茶葉拾	同						
二十六	日	快晴	茶葉拾	同						
二十七	月	快晴	茶葉拾	同						
二十八	火	快晴	茶葉拾	同						
二十九	水	快晴	茶葉拾	同						
三十	木	快晴	茶葉拾	同						
三十一	金	快晴	茶葉拾	同						

の勤勞動員(表2)が行われるなど、適時、適所で教科と生活とを一体化した教育手法がとられた。勤勞動員の内容としては、蝗(いなご)採集を始め、栗拾いや稲刈り、芋掘り、甘藷(さつまいも)俵づめ、草むしり、地ならし等があり、食料が極度に不足した当時の事情をよく表わしている。

その後、空襲が一段と激しくなると、昭和20年4月の新学期から初等科の授業が